

「あちいなあ……」

砂漠という土地柄では仕方ない事とは言え、暑がりのグレゴにとつてこの地の外気温は堪える。服の胸元を摘んでばたばたと風を送り込んだところで、じつとりと噴き出る汗が引く訳でもない。金が無いからつてこんなどこでの護衛なんて引き受けるんじやなかったと後悔しても遅く、岩場を掘られて作られた洞窟の外で日陰に入りながら見張りをしていると流石に目眩がして足元がふらついた。

「危ねえな、ちゃんと水飲んでるか？ そろそろ交代だぜ」

「んー？ おお、もう水が無くなっちゃったんだよな、助かったぜ。んじや、ちょーつと休憩してくるわ」

その時、同じく雇われの身の男が姿を現し、グレゴに交代の旨を伝えた。これ幸いとばかりにほっとした表情で休憩の為に設けられている詰め所へ足を向けると、外とは違って随分と涼しく、滲み出た汗が冷えてぶるっと震えた。

仕事内容は荷運び中の護衛、という事しか聞かされておらず、その荷物については一切聞かされていないが、長い事情兵という職業に就いているグレゴは余計な詮索をしない方が良いという事も良く分かっているので聞こうとも思わない。ただ、良からぬ噂しか聞かないこの地方の宗教団体の護衛という時点で推して知

るべしという暗黙の了解もあった。どうせろくでもないものを運んでいるに違いない。そう、例えば生贄とか――

「いやー！ 離して、離して！」

「……ん？ な、何だあ？」

あまりの暑さに頭がぼーつとしていたのか、詰め所とは全然違う方へと足を向けてしまっていたグレゴは、奥の方から聞こえてきた子供の泣き声にはっとした。雇い主からこちらには来るなど言われていた場所であつた為にまづつたなどは思ったが、抵抗する少女の泣き声を聞いてしまったからには駆けつけない訳にもいかないだろう。喉が渴いてる時に面倒なども思わなかつた訳でもなかつたけれども、それよりも先に足が走りだしていた。

奥の通路を曲がった先にあつた鉄の扉の向こうへ、ロブを着た男が泣き叫ぶ少女を押し込めて閉めたのを見て、グレゴは怒つたものやら呆れたものやら分からず先程感じた目眩とはまた別の立ち眩みを覚えた。何をする為に部屋へ押し込んだのかは予測がつくが、念の為に扉に張り付き聞き耳を立てると、分厚い鉄の扉を隔てても聞こえた少女の泣き声が彼に全てを教えていた。こちら強姦魔の護衛を引き受けた訳じゃねえつーの、と怒りを籠めて扉を開けると、寝台の上には押し倒された少女が必死に男に抵抗している光景が

グレゴの目を直撃した。

「この……っ、腐れ外道が！」

「ぎゃあああっ?!」

暑いし喉が渴いているし疲れているし腹も空いているし、おまけに雇い主の一員はロリコンで強姦魔だし、最悪もいいとこだという怒りを籠めて、驚いた顔でこちらを振り向いた男に携えていた剣を抜かずに思い切り頭を殴る。不意打ちとも言えるその一撃を躲す事も出来なかつた男は、あっさりと吹き飛ばされて沈んだ。抜身を斬らなかつたのは、少女の目の前で殺す事が躊躇われたからだだった。

「うう、ぐすっ……ありがとう、おじさん」

「お、おじさんく? ま、まあ、お兄さんじゃねえけど……って、んん?!」

後先を考えずに気絶させたは良いがさてどうするか、取り敢えず縛っておくか、と床に倒れた男が着ているローブで後ろ手に縛っていると、襲われていた少女が泣きながら礼を言ってきたのだが、敵つい見た目に反して繊細な心の持ち主であるグレゴは大いに傷付いて少女を振り返る。しかし、そんな傷心など吹き飛ばす程の驚きでぎよっとし、暫し絶句した。その少女が「少女」であるならば、無い筈のものがそこにあった——というか、付いていたからだ。暑さで頭がおかしくなったのかとグレゴが思ったのも詮無い事だろう。

「え、あ、んん?! あ、あんた男なのかあ?!」

「違うよお、ノノは女の子だよ」

「い、いやー、女の子にはそーんな立派なもんについてねえよな?!」

「うう……」

「つとと、あつぶね、こいつは……こ……よ……つとと」
大声を出してしまつたせいで気絶させた男が呻き声を上げた為、気が付いてもすぐに出来ない様にと寝台の下に男を押し込み、念の為所持していたタオルで足も縛っていると、背後から扉が閉められた音が聞こえた。その音に振り返れば、ノノと名乗つた少女が逃げずに律儀にも涙を拭きながらこちらに歩いてきている姿があつた。……やはり、ずれた下着——否、恐らく彼女にとつてはこれが服なのだろうがグレゴには下着にしか見えなかつた——からは、立派な男のそれが見えていた。扉を開けた時に男が驚いていた顔をしていた原因はこれかも知れない。

「あ、あのな、隠す気がねえ様なもん穿くな」

「へ? ああ、おちんちんのこと? いつもは生えてないもん、さっきみたいに危ない時にこうやって生やすんだもん」

「はあぁ?!」

小さな体に不釣り合いな程、立派にそそり立っているペニスには正直言って見たいものでもなく、グレゴは

目を逸しながら指差して咎めたのだが、常識では考えられない様な事を言われて思わずまたノノを凝視する。成人男性のそれよりも大きなペニスと元氣よく天井を向いており、グレゴは若干引き攣った顔になった。

「ノノはママクートで、人間じゃないの。だから、おちんちん生えてもおかしくないの」

「わ、分かった、あんたが人間じゃねえって事と女の子っていうのも取り敢えず信じるし、もう危なくねえからそれ戻してくれるかなー？」

ノノの口から発せられたママクートという単語は寝物語の中で聞いた事があるが、今はそれどころではないグレゴは歩み寄ってくるノノに対して後退った。自分にも付いているものとは言え、矢張り他人のいきり立ったものは目にしたくない。しかし寝台に背中がぶつかり、それ以上は後退出来なくなってしまう。そんなグレゴに、ノノは困った様な顔をした。

「白いおしっこ出さないと戻らないもん。おじさん、手伝って？」

「は、え、えええ?! し、白いつてそれ、ザー……いや、いやいやいや、悪いけど俺はそこまで面倒は見れな……」

「うう……おちんちん痛いよお……」

非日常すぎる光景と言葉に混乱も最高潮に達したグ

レゴは一瞬気が遠のいたものの、ノノが半泣きで訴えた下半身の痛みにそれ以上の拒絶を封じられてしまった。勃起したまま放置された状態の辛さというのは分かるし、彼は年少者から涙を溜めた目で懇願されると邪険には出来ない性格であったから、自分でどうにかしろとも言えなかった。

「て、手伝うって、何すりや良いんだあ……?」

「手伝ってくれるの? やったあ、じゃああーんして」

「はあ? あーんてまさか……つぶつぶ!!」

口を開けるという要求に対して嫌な予感があったグレゴが慌てて閉じようとするも遅く、頭を小さな手がつちり捕まれ、いきなり僅かに開いていた口に無理矢理ペニスを押し込まれた。遠慮無く舌の上を滑っていくペニスを押し出そうと抵抗する間も無く、喉奥に亀頭の一撃がお見舞いされる。

「んぶっ! おあ、ぐえ、うえっ!!」

「ああ、いい、きもちいよお、おじさんのお口の中、あつたがぁい……♡」

「んんん!!」

何度も喉奥の肉壁を突かれて嘔吐きそうになっているグレゴの濁った声とは裏腹に、うっとりした様なノノの声は上擦って熱を帯びていく。口での奉仕の気持ち良さというものはグレゴも知っているが、だからと言って彼は買った娼婦にこんな乱暴な口姪を強要した

覚えは無い。手加減を知らないのだろうノノは、グレゴの苦しそうな声など気にする事無く何度も腰を引いては打ち付けた。

「んっ、んぐ、んぶうっ！ うごっつ、ぶえ……っ」

「ひゃああ♡ ああ、ふあ、あつたかい、きもちい♡」

しょっぱい様な苦い様な、どこか甘い様な味の体液が唾液と混ざり、飲み下せなくて無様にも口から漏れ、首を立てて床に零れる。苦しい、死ぬ、と息苦しさを訴えようと涙目でノノを見上げると、口の中の熱や柔らかさが気持ち良いのか唾液も汗も拭う事なく上気して潤んだ目で見下ろされており、不覚にもグレゴは下腹部がぎゅうつと掴まれた様に錯覚した。

「……ぶへっ！ げはっ、げ……っ、うう、」

「なん、れ、やめちやうのお……？ まだおちんちん収まつてない、よお」

「あ、ちよ、やめ……べへっ」

しかし何度も喉の最奥まで力任せに突かれ、危うく吐きそうになったグレゴが力を振り絞ってノノの体を引き剥がして咳き込むと、口を使わせて貰えなくなつて焦れたいのか、ノノは彼の頬にぐいぐいと亀頭を擦り付けてきた。生暖かいそれから発せられるにおいと粘度のある体液は普通なら顔を響めてしまうものなのに、何故か頭がくらくらして下半身が熱くなつてしまい、抵抗が出来なかった。

「ま、待て、嬢ちゃん、あーんな風になんがんぶちこまれ、たら、俺も苦しい、から」

「ひゃあん♡ あ、あっ」

「し、抜くだけで堪忍してくれねえかなー？」

「ふにゆう……」

尚も口にペニスを振じ込もうとしてくるノノの細い腰を片手で掴んで顔を遠ざけ、動きを封じようと空いた手を滑らせる様に唾液でべたべたに濡れた竿を握ると、小さな体をぶるりと震わせたノノがグレゴの頭にしがみついた。その反動でまたペニスが口元まで近付いたものの慌てて腰を掴んでいた手に力を込めて阻止したグレゴは、蜜が溢れる亀頭から口を離そうと腰を浮かしてはらはらしながら彼女を窺い見る。もうさっきの様な苦しいのはごめん、という気持ちでいっぱいだった。

「ここ、こすりつけるの、気持ちいい……」

「ここ？ ……な、中々マニアックだなー、あんた」

体をぴくぴくさせ、熱い吐息混じりに言ったノノの言葉に、グレゴは一瞬何の事か分からず僅かに眉を蹙めたのだが、彼女が腰を擦り付けようとしている箇所気が付いてまた口元を引き寄せた。腰を少し浮かせてせいで亀頭がちょうどグレゴの胸の辺りに擦れていたのだ。男のパイズリとか聞いた事ねえよと思いつつ、口にぶちこまれるよりましかと、譲歩して、上着

を下から捲った。

「こ、これで良いかあ……？」

女性の胸を使う時は谷間で擦るが、一応は鍛えているグレゴにも胸筋で谷間の様なものはある為には捲つてやると、ノノは穿いていた下着の様なものを脱ぎ捨てひとりと体をあて、腰を上下し始めた。溢れる先走りの体液がグレゴの胸を汚し、またノノが腰を突き上げる度に完全に脱いでいない上着の襟元から亀頭が顔を覗かせて、何とも言えないにおいが鼻腔を侵す。

『あ……もつたいねえ………つて、んん?!』

ところとろと零れるその蜜を見て思わず生唾を飲み下しながらとんでもない事を考えていた事に気が付き、喉が濁ききってしまったからだそうに違いないとグレゴは必死に自分に言い聞かせた。そんな彼の焦りなど知る由も無いノノは、夢中で腰を振ってペニスを胸板に擦り付けている。

「おじさんのおっぱいひもちい……♡ ああ、か、か
たあい……♡」

「お、おっぱいって、せめて胸板って言うてく……っ
んあ、そ、そこに擦りつけるなっ」

「なんれえ、乳首気持ちいれしよ……っ？」

「っは、ああ、あつ、あつ……」

さつきまで苦しめられていたそのペニスが口元に届きそうになり、無意識に口を開けそうになっていたグ

レゴはノノの言葉にはっとして抗議をしたのだが、滑る亀頭が突然乳首を弄り始め、彼は上体だけを寝台に沈めてしまった。体勢的に腰がつかないが、退路を断られたグレゴにはこしか逃げ場が無い。それでも執拗にペニスで乳首を押し潰され悶えていると、不意に股間を何かで軽く刺激され悲鳴が出た。

「ひいっ! い、あ、あああ、な……っ?」

「わあ、おじさんもおちんちんおつきくなつちやつたね、ノノとおんなじだね♡」

「や、め……っ、お、俺は良い、からっ」

どうやらノノは爪先で器用に触ってきたらしく、その中途半端な愛撫から逃れようと、グレゴはつい寝台に腰掛けてしまった。しかしそれが裏目に出てしまい、足ではなくて両手で股間の盛り上がりをつまみ、腰が浮く程体が跳ねた。

「あひ、ひい……っ! よ、せ……っ」

「おじさんの首、いいにおいがすゆ……」

「い、いいにおいって、ちよ、汗臭えからやめっ……
んんんん?!」

その上耳朶を甘咬みされ、首筋に吸い付かれながら嗅がれて、流石にこれ以上足を踏み入れてはいけないのではないかとグレゴは身を振ってノノを引き剥がそうとしたのだが、その小さな体のどこにそんな力があるのか彼が逃げる事すら出来ない程に頭を再度がっち

りと掴み、口を塞いだ。ノノの柔らかな唇がグレゴの荒れた唇を食み、分厚い舌を絡めとって吸い上げる。

今までそれなりの数の女を抱いたというのに、情けない事にグレゴは子供とも呼べる容姿のノノ相手に腰が砕ける寸前で、容易く寝台に押し倒された。

「んっ、んん、んああ、んぶ、ふ……っうう、あ、やめ、触るな、嬢ちゃん、ほんとやめ……」

「んもう、ノノはノノだよお」

「わ、分かった分かった、ノノ、俺は脱がせなくて良いか、らあっ！」

「ふにやあああ……♡♡ おじさんの体、どこもかしこ

もきもちいね……♡」

「ん、ううっ！ やめ、し、抜かねえでくれっ……」
名を呼ばなかった事を不満気に責められても、ズボンをずり下ろされ焦っているグレゴは一度名を叫ぶのが精一杯であったし、勃起した自分のペニスをノノのそれと一緒に握られ擦り合わせられて一瞬目の前がちかっと光った。ただでさえ女っ気が無い期間を過ごしてそれなりに溜まった状態であったので、理性が吹き飛びそうになる。

「あああ、はっ、あ、ふん……?!」

「おじさんもきもちいの？ しゅごい声れたねえ♡」

「しや、喋りながら弄るなっ、舌で擦れ……っああ、はあっ、あゝっ」

押し退けようにも姿形が少女のそれであるノノに乱暴な真似をしたくないと考える余地がまだ僅かに残っていたグレゴは、だからはだけた胸にノノが思い切り吸い付いてきても引き剥がす事が出来なかった。しかもすっかり勃ち上がった乳首を吸われながらにちにと音を立ててペニスを抜かれると変な声が出て、思わず両手で口を塞いだのだが、ぬる、ぬる、と粘膜が絡み合い、すっかり剥き出しとなった亀頭を指で捏ね回されては我慢する事が出来ず、無様な声を漏らしてしまっ

「ああ、おじさん、ノノもうがまんできないよお」

「は……? え、な……ちよ、待て、まーて待て待てー」

しかしぼうつとした頭を一気に冷やしてくれたのは、力一杯彼の体を横に転がしてぐいと腰を上げさせたノノだった。これはまさか物凄く危険な状態なのではないかと一瞬にして血の気が引いたが、果たしてその悪い予感的中していた様で、尻の割れ目に熱い棒状のものにゆるゆると擦り付けられたのを感じた。

「む、無理だっ、よせ、そ、そんなもん入る訳……」

がががががががが！！

「はああ、ああ、あつたがあい……♡」

がががががががが！！

自分のものよりも大きいであろういきり立ったペニスを慣らしでもない孔に思い切り挿し込まれ、グ

